

法その他に就いて検討中であるが、現在迄の成績についてその方法と検討した点に就いて報告する。

① 未熟児に於ける頻回の大量輸液には、骨髓内が操作も比較的容易であり、量的制限も少く、よくその目的を達し得る。

② 剖検例にて骨髓に著明な障害は認められなかった。

③ 生存し得た児については、その後輸(血)液部位に著明な障害は認められない様である。

④ 骨髓内点滴注入法に就いては、特に器具固定の問題について検討中である。

#### 78. (演) 東京都立築地産院における過去6年間の新生児剖検例の検討

(都立築地産院) 竹内繁喜, 名取 光博

\*柳田昌彦, 吉川千壽郎

大川昭二, 馬場 一雄

(東大小児科) 河野睦明, 大津 正一

所沢 剛, 井上 清美

新生児哺育に関しては、現在各方面において問題となっているが、その死因についても種々論議されている。そしてその決定は非常に困難なことである。嘗てはその直接死因として、頭蓋内出血が最も重要視されていたが、Potterの提唱による、肺換気異常の概念が発表されてより、死因決定について一段と進展がみられた。

吾々は当産院において、昭和31年より昭和36年迄の6年間の、妊娠8カ月以後の死産と新生児死亡について、東大分院病理部の協力を得て剖検したので報告する。

剖検の年次的変動は、昭和31年は全死産及び新生児死亡の15%にも充たない剖検数であったが、昭和35年には90%に達し、現在では殆んど全例を剖検するに至った。

総剖検数は81例、内未熟児は52例である。

これを死因別に見ると、肺換気異常26% (以下%略)、肺出血6、肺炎7.5、頭蓋内出血20、核黄疸1、肺炎以外の感染症7.5、その他の出血3、奇形17、脳浮腫3、窒息2、浸軟6である。

以上検討するに、未熟児においては、肺換気異常、及び出血が死因の大部分を占め、成熟児にては感染症、奇形が多く認められる。又窒息が20%に認められるが、哺育担当者の不足を物語るものであり、この点の確立を痛感する。

尚異常妊娠、異常分娩等との関係をも検討して述べたいと思う。

#### 79. (演) 胎児及び新生児死因に関する臨床病理学的研究 (第2報)

(東京警察病院) 竹内 正七, 松枝和夫

宮原 忍, 畠山良弥

須田稻次郎, 藤崎雅子

従来、胎児及び新生児死因分類が報告されているが、主として小児科学的立場からであり、産科医が自らの分娩誘導法の当否を論ずるには必ずしも妥当と云えない面がある。そこでわれわれは既に第22回本学会関東連合地方部会において、産科学的立場からの胎児及び新生児死因の検討成績を報告した。

今回さらに症例を加え、昭和32年12月より現在までの分娩総数1391例(中双胎15例)により娩出された体重800gr以上の児、1406例(子宮内死亡例を含む)及び他院より当院未熟児センターに送られてきた未熟児60例を加えた1466例の児について、52例の死亡を認め、その50例につき病理解剖学的検索を行った。

その結果われわれは他の統計に比較して肺換気異常と無酸素症の2項に於て死亡が多く分娩時障害に於て死亡が少い結果を得た。胎児のAnoxiaの問題と結びついている過度羊水吸引は分娩誘導法の検討の上に重大問題を含む。肺硝子膜症はわれわれの症例では定型的なものは認めなかった。又、分娩時障害(頭蓋内及び脊髄出血など)に於ける無酸素症性出血と外傷性出血の鑑別が意外に困難でその取扱い方により死因としての意義も亦変動し易いことを認めた。

#### 80. (示) 新産児身長、体重頭囲と母体骨盤外計測との関係について

(日赤産院) 奥村裕正, 茂木昭子

\*西川 裕, 岡 郁也

当産院に於ける昭和30年より昭和35年に到る分娩例より、母体に妊娠中毒症や妊娠中毒症後遺症を合併したものの、梅毒に罹患している者及び新産児が双胎児又奇形児や特殊な疾病を発見した児を除いた20019例につき(但し在胎期間38週以上のもの)母体の年齢が29才以下の初産婦と、30才以上の初産に分類し夫々新生児の初体重、身長、頭囲と母体の骨盤外計測との間に有意の関係ありや否やにつき次の結果を得たので発表する。

(イ) 29才以下の初産、(ロ) 30才以上の初産につきそれぞれ

① 新産児体重と母体骨盤棘間径につき有意の相関関係のあることを認めた。

昭和37年2月10日

第8群 新生児に関する問題

139—37

② 新産児体重と母体骨盤楯間径につき有意の相関々係のあることを認めた。

③ 新産児体重と母体骨盤外結合線につき有意の相関々係のあることを認めた。

④ 新産児身長と母体骨盤棘間径につき有意の相関々係のあることを認めた。

⑤ 新産児身長と母体骨盤楯間径につき有意の相関々係のあることを認めた。

⑥ 新産児身長と母体骨盤外結合線につき有意の相関々係のあることを認めた。

⑦ 新産児頭囲と母体骨盤棘間径については有意の相関々係は認められなかった。

⑧ 新産児頭囲と母体骨盤楯間径については有意の相関々係は認められなかった。

⑨ 新産児頭囲と母体骨盤外結合線については有意の相関々係は認められなかった。

### 81. (示) 新生児の生後6日間の形態的变化

(神奈川大口病院) 小野 肇

新生児初期における身体各部の大きさの消長についての報告は全く見当らない。

そこで私は本研究を企てた。

計測対象は当院で出生した正常新生児男性173例, 女性196例と, 帝王切開術新生児男性17例, 女性12例である。

計測項目…身長, 頭臀長, 軀幹長, 上肢長, 下肢長, 肩巾, 骨盤巾, 上前腸骨棘巾, 転子間経, 胸囲, 腹囲, 骨盤囲, 体重, 頭長, 頭巾, 頭耳高, 顔巾, 顔高を測り, 示数として, 比軀幹長, 比上肢長, 比下肢長, 比肩巾, 比骨盤巾, 比胸囲, 比腹囲, Roller 示数, 頭長巾示数, 頭長高示数, 頭巾高示数, 比頭囲等を算出した。

計測方法…出生直後から毎日1回づつ, ほぼ一定の時刻に, 生後第6日目迄計測を行った。

計測成績…(1)生後6日間殆んど変化を認めなかったもの…骨盤巾, 上前腸骨棘巾, 転子間経, 骨盤囲。

(2) 生後少しずつ増大の傾向を示したもの…上肢長, 下肢長, 肩巾, 胸囲, 顔巾, 顔高。

(3) 生後一旦減少し次いで増大の傾向を示したもの…身長, 頭臀長, 軀幹長, 体重, 頭長, 頭耳高。

(4) 生後著明に変化を示したもの…腹囲, 頭囲, 頭巾。

(5) 示数については身長に対する割合が成人より小さいもの…上肢長, 下肢長, 骨盤巾, 成人より割合が大きいもの…軀幹長(や>大), 肩巾, 胸囲。

(6) 頭部は長さや巾の割に高さが高い。

### 82. (示) 新生児の脳波に関する研究

(三重大) 富沢 康二

前回の学会に於いて, 正常産成熟児, 未熟児, 帝王切開児, 鉗子分娩児の脳波を生後第1日目, 第3日目, 第7日目に分け, 睡眠時と思われる状態に於いて描写し, 各生後日数について周波数度数分布図, 各周波数帯域に於ける波数及び振巾和, 徐波成分の検討を行い発表した。

今回は新生児に於いても成人脳波の様に覚醒時と睡眠時の脳波に差異があるかについて検索した。覚醒時の描写は睡眠時より更に一層困難であり, 例数は少なかつたが種々の観点より分析の結果, 覚醒時脳波は睡眠時脳波に比し, 一般に低振巾であり,  $\delta$ 波の出現数も少く, 有意と思われる差異を認めた。

更に併せて睡眠時と考えられる状態で骨盤位娩出児脳波を描写した。生後第1日目の波形は正常産成熟児脳波より低振巾で徐波数の出現も少なかつたが生後第3日目には正常産成熟児脳波に近づいた。すなわち骨盤位娩出児脳波は帝王切開児脳波に近い波形が認められた。

### 83. (示) 新生児の脳波に関する研究

(正常産児の脳波 第II報)

(東大分院) 前原大作, 日向 正

私らは新生児脳波を記録, 検討することにより分娩が新生児の脳に如何なる影響, 並びに将来精神及び脳發育に如何なる影響を与えるかについて, 前回本学会に於て正常分娩及び異常分娩について報告したが, 今回はさらに症例を重ね, 特に基本となる正常分娩児の脳波の個体発生についての包括的な考察を試みた。

方法は前回考案の如く, 直径8mmの円盤型表面導出用脳波電極をセロイジンを塗布したスポンジ片で児の頭皮上に固定し, 電氣的に遮閉を施した保育器内から単極及び双極導出を行い増幅記録した。

記録は生後24時間以内に第1回, 以後第2日目, 第3日目, 第5日目, 第7日目と, 5回にわたり継続して。

1) 自発脳波の個体発生

2) 視, 聴, 触覚刺激に対する誘発電位の発達及び分化。

3) 周波数分析(自己相関)による新生児皮質の excitability cycle の発達。

などを中心に, 脳發育にともなう新生児脳波の発達の